青髭１１

明宏訊

　ハムラビは、恰幅のいい男である。年齢は‥‥オリエント人は外見だけでは年齢はわかりにくい。アンリは、初対面だというのに友好的な態度をとる男にただ戸惑うばかりだった。服装は、希少本の挿し絵に描かれている通りだったことも、彼の不安感を少しも解く手助けにはならない。
　それにしても不思議なことは、第六回薔薇十字軍は何百年も前の話なのだ。エウロペとペルシア間において締結された条約によって、魔法障壁と呼ばれるカーテンが青海にかけられた。そのため相互の行きかいは完全にゼロになったはずだ。少なくとも、アンリはそう教えられてきたし、そのことについて疑義を差し挟んだことはなかった。
　当時の伯爵が秘密裏に隠匿したという。それは自ずから疑問を生じさせる。
「ハムラビ殿、あなたは３００歳なのか？」
「いや、この城が私の苗床だ」
　いささか個性的な言葉の選択ながら、完全に流暢な、ほぼ母国人といっていいほどのナント語である。
　オリエント人は、二重あごを震わせながら、言葉を続ける。
　あきらかに、彼の身体にエウロペ人の血が流れているとは思えない。混血とは互いの色を薄くするらしいと、すなわち、白はその属性を失って黒くなり、黒は、その逆に白っぽくなると、希少本には書かれていた。だが、目の前の男の黒さには驚いた。書籍によって知ってはいても、さすがにお前は新種の皮膚病なのかと言いたくなってしまうぐらいに黒ずんでいる。いや、これが彼にとってみれば健康な肌なのか。

「閣下？」
　ふと、主君を仰ぐと、彼は微笑んでいた。ジャックも、あのアンヌまでもが陶器の頬にかろうじて表情をにじませている。新人なのだからしょうがないのだろうが、自分だけが事実を知らされていない。この不快感はどうだろう。ギョイエンヌの館においては、彼が
自分の都合によって逐電していたのだから、居場所がないのは当たり前なのだが、この城においては全く当てはまらない。
　だが、この家族のような雰囲気はどうだろう。アンヌはロペスピエール侯爵家の人間であって、両家に血縁関係がないことはわかっている。少年の家の話は聞いていない。じつは怖くて聞けないのだ。彼の口からどれほど偉大な家名が迸りでてくるかと思うと、その結果を安静に受け止められる自信がない。いや、それよりもあのもったいぶった顔つきが憎らしい。

　ハムラビが入ってきたとたんに温かい空気がかもし出されはじめたような気がする。
この三人、いや、このハムラビという男も含めて四人の間には疑似家族、こういう概念はアンリが拵えたものだが、まさにそれに当てはまるかもしれない。

　ハムラビとのやりとりで不思議なのは、完全にオリエントと断交しているにもかかわらず、あたかも、彼がそちらからやってきたかのように思えることだ。もしくは、この城のどこかにオリエント人のコミュニティでも存在させているのだろうか？伯爵の端正な顔を盗み見しても何も摑むことはできない。しかし、その理屈ではつじつまが合わないのだ。かの人種の女性は何処から連れてくるのだろうか？何百年前の戦争で、アダムとイブよろしく男女ともに拉致したということだろうか？
「ハムラビ殿、あなたは独身なのか？」
思わず、疑問が即座に言葉に出てしまった。貴族社会ではこのようなことをむやみに質問することを不躾であると指弾する。こういうことを尋ねるにはそれなりの配慮があってこそ、という暗黙の了解があるのだ。
「妻を紹介しようか？だが、それをいうなら、あなたは妻帯者なのか？」
「私には妻はいない」
　まだ･･･と言い出すことができなかった、ということはそのつもりはないということだが、自分の年齢を考えれば然る家から妻を迎えていてもおかしくない。いや、ことによればルイやギョームであってもそれは同じだ。おそらく、自分のことがあって彼らは遠慮してきたにちがいない。そういえばどのような女性が好みなのか聞いたことがない。ルイはともかく、ギョームとはそういう時間を共有すべきときに離れていたことが悔やまれる。
アンリは、不思議な気持ちだった。なんとなれば、実際の家族たちよりもいま彼が目の当りにしている人たちと、そのような、たとえば疑似的な家族のような、そういう関係を結びたいと思っていたからだ。

　この人たちと同じ時間と空間を共有することはそれに叶っているとは皮肉なはなしだ。伯爵は、アンリが仕える主君である、その青い血に濃さからいえば天上に位置する人であり、ジャックのことはまだわからないが、アンヌに至っても同じことだ。彼女に関していえば格下だという先入観を持っていただけに、いわくつきとはいえ名門の家名を出されたときには慌てふためいた。ハムラビは遠い異世界の人間であるが、歴代伯爵家の当主が目をかけるだけであって、向こうでもかなりの門地を所有する貴族にちがいない。
　そう考えると、この場にあって自分は最下層ではないか。ブーリエンヌ女伯爵家にあって、平民を演じていたころとはちがう感覚だ。当時は、余裕があった。演技していたということは、こちらが主導権を握っているということだ。もっとも、女伯爵閣下はすべてを見通しておられたようだが、いまおもえば赤面ものだが、当時、アンリは、あの家をすべて仕切っているつもりだったのだ。
　物思いにふけりはじめたアンリを現実に引き戻したのは、伯爵の声だった。
「ジャック！人が見ていないとおもって何をしとる！」
「閣下･･････」
　伯爵の見ていない隙をついて、アンヌが用意したワインの瓶に手を出そうとしていたのだ。
　そこには世間の人たちが恐れる「青髭」は存在していない。むろん、貴族の顔では市井にまっ

たく顔を出さす、青い血の世界においてはここ１０年で一度も王都ナルボンヌに伺候したことはないというから、いい噂が流されなくても自業自得とはいえるのだが、それにしても城下において流布されている噂話には耳を疑う内容も多い。

　王都から帰郷する際に拾った、場末の酒場で流布していた話など、ひとつひとつは荒唐無稽ながら、火のないところに煙は立たないというから、葉の一枚一枚はともかく根幹を想像せずにはいられなかった。もちろん、それには王都で貴人たちの間の噂が先入観を与えていたことは否定できない。
女伯爵の客を送り出すときに、それほどブーリエンヌ女伯爵家になじみのない貴族が、たしか、同家に古くから伝わる楽譜を閲覧にきたと記憶しているが、最後にこう言ったのである。
「われわれが、カルッカソンヌ伯爵に関して噂していたことは、ご主人にはくれぐれも内密にしてほしい」
　楽譜を蔵に取りに行く、当然のことながら同家にとってみればかなり貴重な品だったので、下働きの者に任せるわけにはいかなかった、その際に、伯爵に関して猟奇的な噂話をしていたのである。しかし、出奔当初にはあこがれていた啓蒙思想にほとほと愛想が尽きていたアンリは、二人の貴族の会話をそれほど信用していたわけでもない。
このような思惑に心を沈ませている間であっても、彼は伯爵を注視していた。主人に自分の内面をそう簡単には見破られたくなかった。だが、しょせんは彼の防弾幕などたいして役に立たないようだ。
「どうしたアンリ？王都が懐かしいか？ここは田舎であって、宝都のような刺激は求めえぬ･･･」
そういってすこしばかり影が入った美貌に微笑を浮かべた。
「いえ、とんでもないことです････」
　畏れ入った従子爵だが、あながちごまかしというわけでもない。宝都で鼻高々にうたわれていた啓蒙思想とやらに彼は食傷どころか完全に毛嫌いしていたのである。そういえば、かつての主人はアンリの前だけはそれに対する嫌悪を否定しなかった。それにして、あれほど毛嫌いしていた人たちを集めてサロンを展開していた理由が、わからない。おそらくは、ある人脈づくりが目的ではないかと、今ではうすうす感じづいてはいる。若い貴族たちに交じって、王の周囲を固めるような重臣たちまでもが姿を見せていたからだ。

　伯爵家の新参者は、いま、彼が視界に収めている主君とあの美しい女主人を並べてみた。双方ともに見目麗しいということに限っていえば共通点はあるが、どうにもお似合いとは思えない･････自分は何を考えているのだろう？人脈のことだ･･とアンリは苦笑せざるをえない。政治上の都合から明らかに王と距離を取る主君、そして、ほとんど王に対する感情を聞いたことはないものの、世情には叛意を吐露していたかつての主君、この二人が結びついていると考えてもおかしくない。まだほとんど目を通していないものの、父親の遺書とでもいうべきノートにはそれらしいことを示唆する記述があった。
　かつての主人とロペスピエール侯爵夫人、なんと同時に王の愛人という噂のある女性だが、二

人は姉妹、そう確かに父親の几帳面な筆跡で書かれていた。
自分は畏れ多くも彼女から全幅の信頼を勝ち取っていた、少なくとも、女伯爵家のうちのことはすべて彼が取り仕切っていたのだ。それが音を立てて崩れていくような気分だ。この睦まじい主従の会話がどこか遠い世界の出来事のように見えるのもそのせいかもしれない。それとも、ナント王ピエール四世を筆頭に、いま、彼の視界に収まっている人たちは、アンリの想像をはるかに超えるところに鎮座ましましているのだろうか？そんなことを考えたら自分などは完全に場違いだ。いるべき世界がちがう。
　いったい、何のための集まりだったがわからないままにお開きになった。アンヌが昼食の時間だと、例によって時を告げる鐘の音のように無感情に告げたからである。
まだアンリをからかいたりないのか、やや赤みがかかった黄色い声を張り上げたが、「バラの世話が終わったとらんだろう」という主人の言葉でおとなしく引き下がった。
伯爵と二人だけになって何か言葉をかけられるだろうと思っていたが、何もなく去っていった。ハムラビの姿はまったくない。あれほどの体躯だというのにまったく音もさせず幽霊のように消え去った。何百年も前の亡霊が、何等かの魔法で魂が囚われていると考えれば合理的といえる。
「くそ！」
　寝具に寝転がった拍子に、怒りに任せて壁に向かって投げつけようとしたのが、父親の遺書ともいえるノートであることがわかって思いと